鶴屋南北全集

第二卷

鶴屋南北全集

第二卷

編集委員　郡司正勝　廣末保　浦山政雄　大久保忠国　藤尾真一　竹柴愬太郎

鶴屋南北全集　第三巻――――（全十二巻）

一九七二年五月三十一日　第一版第一刷発行

定　価　四、五〇〇円

編　者　浦山政雄　©　一九七二年

発行者　田川敬吾

発行所　株式会社三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三（二九一）三一三一番
振替東京八四一六〇番
郵便番号　一〇一

印刷所　株式会社三陽社

製本所　株式会社鈴木製本所

0393-721803-2726

凡　例

表記は、底本のままを原則としたが、読みやすくするために、次の諸点に手を加えた。

1、台帳では、セリフの冒頭や、トガキの文中の人物名を、俳優名で示すが、これらは役名に改めた。ただし、役名の不明なものや、早替りなどの場合、トガキには俳優名をそのまま用いた。

2、役人替名は、底本に記されたものをとらず、各幕ごとに登場順の配役表を付した。なお、役名は本文と番付とを勘案して統一した。

3、各役のセリフごとに行を改め、セリフの頭付け「一」は省略した。

4、漢字の字体は現行の新字体を用いたが、正字・異体字などは、なるべく底本の字体の再現につとめた。ただし、特殊な用字や草書体は次のごとく処理した。

吳→異　逮→違　宜→宜　吉→吉　魚→魚　障→隙
冗→穴　結→結　釼→剣　絹→絹　皷→鼓　最→最
尻→尻　森→森　敕→数　勢→勢　臺→臺　奪→奪
竹→竹　点→点　ホ→等　抜→抜　富→富　負→負
廣→褒　廣→摩・魔　迄→迄　萩→藪　留→留
鹿→鹿
ほ→かしく　斗→計・ばかり　ムリ升→ございます
と→こと　さま→さま・さん　し→しめ　ゟ・ゝ→候
也→也　ヒ→被　式ア→式部　タア→夕べ
参らせ候→参らせ候　より→より
斯→かく　爰→ここ　此→この　其→その
夫→それ　成→なる　被成→なさる　能→よく

5、仮名づかいは、すべて底本のままとしたが、平仮名の字体は現行のものに改めた。また、助詞や語尾に用いられた片仮名のハ・ミ・ニなどは、漢文の送り仮名式用法の場合を除いて、平仮名に改めた。

6、本文中ルビの原則は次の通りである。

イ、底本の仮名を漢字に改めた場合、底本の仮名は当てた漢字のルビとして残した。

ロ、読みにくい漢字には、（　）を用いてルビを付したが、この場合は現代仮名づかいを用いた。

ハ、底本に付されているルビは、へ　〉を用いて原形を示した。ただし、四天王櫓砦は、底本が総ルビに近く、また誤りも多いので全部削除し、改めて、ロの原則によるルビを付した。

7、句読点ならびに清濁は、校訂者の見解によってこれを施し、また改め正した。

8、思い入れを表わす記号「〇」や、反復記号は、底本のままとしたが、「〻」は、漢字・平仮名・片仮名の場合に応じ、それぞれ「々」「ゝ」「ゝ」に改めた。

9、当字は底本のままとしたが、明らかな誤字は正し、脱字は（　）を付して補い、衍字は削除した。

10、底本の誤りや脱落を、他本によって改め、または補った場合は、〔　〕を用いたが、他本がなく、底本のままの場合は、該当個所に＊印を付した。

11、大南北全集第九巻より転載した松梅鶯曾我については、次の原則に従った。

イ、前記凡例に従って、各幕ごとに役人替名を付した。

ロ、漢字は現行の字体に改めたほかは、原本通りとした。

ハ、ルビは、読みにくいものだけ、歴史的仮名づかいのまま残し、他は削除した。

ニ、句読点の脱落は補い、明らかな誤りは訂正した。

ホ、思い入れを表わす「……」は「〇」に改めた。

ヘ、脱字を示し、または補なった場合は、（　）を付した。

12、草双紙については、次の原則に従った。

イ、漢字の字体は原本の再現につとめた。ただし、長兵へ→長兵衛

右ヱ門→右衛門　とした。

ロ、人名の乱れは統一せず原本のままとした。

ハ、漢字のルビは全部残したが、仮名に漢字を当てた場合は、ルビを付けなかった。

13、本巻の草稿は左の諸氏を煩わした。

梅崎史子　心謎解色糸・當穐八幡祭

近藤瑞男　四天王櫓碁・盗話水滸傳

三浦広子　昔摸様戯場雛形・當世染戯場雛形

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

鶴屋南北全集　第三巻　目次

心謎解色糸……7
當穐八幡祭……85
四天王櫓磐……191
鑑話水滸傳……283
松梅鴬曽我……365
昔摸様戯場雛形……447
當世染戯場雛形……475
解　説（浦山政雄）……505

校訂

心謎解色糸……浦山政雄
當穐八幡祭……浦山政雄
四天王櫓碁……浦山政雄
豎話水滸傳……浦山政雄
松梅鶯曽我……渥美本
昔摸様戯場雛形……浦山政雄
當世染戯場雛形……浦山政雄
錦絵（當穐八幡祭）……日比谷図書館蔵

鶴屋南北全集　第三巻

心謎解色糸（こゝろのなぞとけたいろいと）

序幕

深川八幡の場
松本の場
笹藪の場

役人替名		
一 山角五平太	市川　宗三郎	一 鳥追おきみ　岩井　松之助
一 神原屋手代金六	市川　栗　蔵	一 同　お六　沢村　川　蔵
一 角力取ずん切庭右衛門	松本　大　七	一 お祭り左七　尾上　松　助
一 鳶の者権	坂東　熊　平	一 半時九郎兵衛　松本　幸四郎
一 同　八	松本　富　蔵	一 石塚弥惣兵衛　市川　門三郎
一 同　△	市川　仙　蔵	一 赤城の若殿光若　坂東　簑　助
一 茶店の婆	若い衆　一人	一 赤城家の奥女中竹川　岩井　梅　蔵
一 糸屋番頭左五兵衛	沢村　四郎五郎	一 腰元若菜　岩井　滝次郎
一 百川東林	松本　小次郎	一 赤城の家中本庄綱五郎　坂東　三津五郎
一 深川仲町の芸者お糸	沢村　田之助	一 松本女房おつた　小佐川七　蔵
一 仲居おまき	中村　春之助	一 腰元　松本　八十八
一 廻し男義助	中村　次郎三	一 九郎兵衛女房おとき　岩井　半四郎
一 鳥追おはる	松本　八十八	

本舞臺三間の間、下座の口、石の鳥居。向ふ石垣の上に玉垣。この前により、簀ばりの茶屋、奉納の挑灯、開帳札、寄上るりの張札など跳の通り。深川八幡（の景色）。ここに山角五平太家中侍の形にて、金六質屋、ずん切取出来の角力取にて、上の床几に腰をかけ、次の床几に権・八・△鳶のもの、余所行の形りにて腰をかけ、若衆茶店の婆〳〵にて茶をくみゐる。大拍子、神楽、鳥追唄にて幕あく。

権　ヤア〔こ〕りや關取の弟子ずん切どのではないか。

ずん　どなたかとおもつたらおそろひなすつて初買かへ。

八　いや今日は何よ。山の手と下町といさくさがあつた所、頭手やいの中酌で。

鳶△　今日二軒茶やで中直り。そこでおいらも雑魚の魚まじり。

ずん　そりやア呑口でござりやすね。そんならあの頭の子ぶん。

三人　そのおまつり兄をまちやわせて居るのさ。

金六　まつといへば五平太さん、昨日わざ〳〵ここまでと、お手紙でござりましたゆへ、弐百両もつてまいりましたが、かの質ものの色紙は。

五平　サア、、藝者のお糸が身請を頼んだ弐百両、いづれ後方。
ずん　もし、そんならあなたもあのお糸さんかへ。そりやアとんだ事だ。
　わたくしは今日あの子がおなじみの。
五平　糸やの番頭左五兵衛〔か〕。大事ない〳〵。おれも左五兵衛をまつて居る。
権　おいらアこゝでまたふより。
〔金六〕　山へいつてまつてゐませふ。
三人　サア、来やれ。

ト鳥追唄、大拍子、神楽になり、蔦の者権・八・△・金六ついて鳥居の内へはいる。すぐにこの鳴物にて、向ふより左五兵衛手代の形り、東林医者にて楊枝をつかひながら出で来て花道にて、

東林　春もやゝ、けしき調ふ月と梅、ではない色と酒。粂本の二階でしやれたらず、また藝者をつれ、山じやれとは妙〳〵。
左五　いやまた、そよと南が吹いてくると、白魚あみで家根舟もよいが、とかくお糸めが酒ばかりくらつて、中の字をきめるにはあやまる。
東林　中の字といへば、あれ、仲丁のまん中をよろ〳〵と、〔とんだ氣性な芸者だ。〕ヨイ〳〵、はやくこないか。お糸ぼう、つんぼう。

ト ながくよぶ。向ふにて、

お糸　なにをわるじやれな東林さん、まちなさんせいなア。

トあつらへの流行唄にて、向ふよりお糸、仲町芸者にて、仲居のおまきにとらまり、酒によひ出でくる。義助、廻しにて三味せん箱を持、ついて出で来り、

まき　左五さんと一所にこよふとおもふても、お糸さんがころばさんせふとおもふて。
左五　ヲット、そのころぶをねがつてゐても、下駄がころばずやで辛気辛苦だ。ドレ、手を引かふか。
お糸　イヱ〳〵、丼で三つや五つのんだとて、酔ふやうなよわい酒じやどざんせん。ゆふべも土橋の玉泉さんとのみあかし、とふ〳〵もりつぶしたは、よつぽど手がらものでござんせふがな。
義助　きつい御じまん。そのたび〳〵にめいわくはこの廻し。酒と一所にお糸さんに回されるハ。
お糸　こまるによつて、いやかへ。
義助　なにさ、御祝義はぱつ〳〵と、去年の雪のやうに、うるせへほどくださるし、これからまた山へいつて水風呂桶ではじめやせふ。
お糸　こりやよいわいなア。
まき　サア、どざんせ。

ト唄の切れにて、みな〳〵本舞臺へくる。

左五　こりや五平太さま、ずんぎりも待かねたであらふな。
五平　左五兵衛、きつふまたしたな。
お糸　おまへは五平太さん、そんなら左五さんともおちかづきかへ。
五平　ヲット、さしだと気づかひがるはもつともだが、これまでは身どもゝ、そもじをくどいたなれど、とんとおもひ切て、これから左五兵衛にとりもつがうれしいか。
お糸　そりやまあ、お礼から先へ言ひやんせふ。
東林　いやまた得心さへすれば、本町筋の番頭株。石丁新道あたりへかこわれ、居ながらおがむつき鐘堂。
義助　ざつと五十や三十の、小金にはこまるまい。
東林　妙〳〵。
ずん　そふいたしたら、わたくしも折〳〵参つて、地どりでもお目にかけませふ。

トこの内お糸、おまきにさゝやいて、紙につゝんだ物を渡す。

まき　アイ、もし、ずんぎりさん、これはお糸さんから。

ト金をやる。

ずん　これはありがとふござります。よろしくお礼を。

トこの内鳥追唄になり、鳥追おはる編笠にて、三味せんをひき、おきみおなじく盃*におひねりをいれ持つて、下座より出で来て、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

きみ　ことぶき祝ふ初春に、七福神の宝舟。○　エイ〳〵。
　トうたひ、おはるは三味せんをひく。
まき　アレ、お糸さん、見なしやんせ。
お糸　ほんにかわいらしい鳥追じやわいなア。
きみ　御新造さん、いれさしやんせ。入れて下さんせいなア。
東林　イヤ、藝者をとらへていれろとは、妙な事をいふわへ。
左五　まア、縁起がいひ。どれ〳〵、壱文やろふ。
　ト銭入より出してやる。おきみ盃にてうける。
義助　こんな子を鳥追ひにしよふより、年一ぱいなら仲町しろもの。
きみ　旦那さん、金下んせ。
立役皆々　ヤ、なんといふ。
きみ　金がほしい。金くだんせ。
はる　これ〳〵、おきみ、そんなことを言わぬものじやぞへ。
左五　ハテさて、付あがりのした乞食め。なんぞ買たいものでもあるか。
きみ　いゝへ、買たいものはござんせんが、金下さんしたら、そ〔れ〕をこわひおばさんにやつてかわいがつてくれる外の小屋へゆきたふござんす。
お糸　ハテのふ、どふやら哀れなものゝ言ひ様。そなたはほんの両親はないかや。
はる　ハイ、この子の親といふてはござりません。貰子か、ひろい子か、このよふに門付に出ても、もらいが薄いと、打たりたゝいたり、それは〳〵むごいめにあいます。私はついとなりでござりますが、常住わびしてやりますわいなア。
まき　ほんにそれは、むごい事にあふ子じやなア。
はる　それで、外のかわいがるうちへ行たがりますが、ちいさい時からせわしたゆへ、金とらにややらぬ〳〵といふ事を聞てゐるゆへ、それで今のやうな事を申まするわいなア。
きみ　銭や米をもらふていなぬと、たゝかれたり、しばられたり、まゝも喰さずに。それがこわい。ほんのとゝさんやかゝさんに、逢ひとふござりまするわいなア。
お糸　きけば聞ほど、いぢらしいその子の身の上。〔まちや〳〵。〕これは足らぬかしらねども、おまきさん、是やつて下さんせ。
　ト鏡袋より小判壱両出してわたす。
義助　ヤア、鳥追ひめに一両とは、仕合ものだな。
まき　それいなア。是〳〵そこな子、これをやらふといわしやんすほどに、どふぞまア、そのかわいがる小屋とやら、内とやらへ。
はる　是はありがたふござります。私が又、内へかへりまして、外へやる相談してやりますほどに、それ迄も人に見らるゝと、直にとりあげられます。おきみ、いたゞいてしまふておきや。
まき　どれ〳〵、わしがよい所へしまふておいてやりませふ。その守りおこしや。
　トさげてゐる守袋をとつて、中より守りを出して見て、
　モシ、お糸さん、てもこのやうな守りがいれてござんす。
　トお糸、なにごころなく取て、
お糸　こりや、真間の継橋、手古奈のお守り。
　トうらを返して、
治承二年戊戌四月五日の誕生の男子十吉。
義助　お糸さん、なんのこつたな。きたない。
東林　乞食の守り、はやく返してしまうがいゝ。
お糸　いゝゑいなア、男子十吉とかいてあるが、この子は女子。ことに。
　ト指をおつて、
年の数のちがひといひ、わたしもちいさい時からもつてゐる、この通りの手古奈のお守り。こりやめつたにない守りといひ、モシャわたしが兄さんが。
　トこの内、おはる向ふをみて、

はる　モシ〳〵、あれ、向ふから、この子をむごふする婆々さんがきまするわいなア。

ト是にておまき、今の守りゑ、いまのお札と金をいれ、おきみがこしへ付けてやる内、通り神楽にて、向ふよりお六乞食婆ア、編笠と三味せんをもち、きよろ〳〵かけて出で来り、おきみを見て、

お六　このがきやア、こゝにうせたか。今朝小屋を一所につれて出たに、ちやんと小路隠れをしやアがつたな。

はる　いゝゑいなア、さいぜん一の鳥居より、はぐれたといふて逢ふたゆへ、こゝに門付して、わけてやろふとおもつて。

お六　それ、そふいふ他人ごふ。なに〔はぐれる物か。うぬが方からは〕ぐらかして。

ト あたまをくらわす。

左五　これ〔さ〕、そふむごくするな。

お六　なにさ、どんなにしても大事ござりやせん。このがきやア、わつちが熊ケ谷にゐる時、捨子か、宿なしの子か、この守りをつけたまゝ、狼がくわへて来たを、〔わつちらが内で可愛そふだと、雑巾に火をくつつけて狼を〕追つ散らし、助けてやつてそだてたがき、頑是の出来るにつけ、仲間のやつらが、拾ひ子だのまゝつ子だのと、他人ごふ〔つけ〕られ、いけねへつちやアござりやせん。サア〳〵、早う歩びやアがれ。また晩は食留だぞ。

ト あたまをくらわす。おきみ、なき出す。

はる　お六さん、そのやうにせいでもよいわいなア。

お六　イヽヘ、うつちやつておきなせへ。是から深川中をひきずりあるく。うしやアがれ。

ト 鳥追ひ唄、すてぜりふにておきみをひきずりゆく。おはるなだめ〳〵向ふへはいる。

東林　なんとむごい婆々アじやアないか。

左五　むごいといふは、あの婆〳〵よりお糸。今のこじきに一両やる、派手も氣量もありながら、とかくおれにやア色氣なく、得心さへすればすぐに身うけ。年季をぬいてやるがなア。

ト お糸むつとして、

お糸　左五兵衛さん、身うけ〳〵と言ふても下さんすな。あげたりおろしたり、調子ちがひの三味せんじやあるまいし。○　おまきさん、義助どん、わしやこの客のざしきはつとめぬぞへ。

義助　またわるい虫をおこして、そんなわがまゝ。

まき　それ〳〵、みな酔ふておいでなんすによつて。

お糸　イヘ〳〵、人をなぶりちらかして、わたしやさがるぞへ。

まき　それじやわるいわいなア。おまへが肝癪おこしなさんすと、わたしが座敷の廻しやうでもわるいかと、内の手前。

お糸　いへ〳〵、わたしがよいよふにいふわいなア。

ト 紙につゝんだ金をやる。

まき　モシ〳〵、是じや猶わるいわいなア。

お糸　イヘ〳〵、なんじやあらふと、下げて下さんせ。

義助　もし、それじやこの義助が内へ済まん。

お糸　済まふと済むまいと、わたしが知つた事かいなア。

ト 包んだ金を顔へうちつける。

義助　ヲヽいたい。

ト とつてみて、

こりやお金。○　こんな痛いめはいくらでも、いたありがたい。

皆々　ハテ、とんだ肝癪持だ。

お糸　どりや、これから杵正さんへいつてのみ直そふわいなア。

ト はやり唄になり、お糸向ふへ行かける。是にて義助・おまき、ぜひなくついてゆく。舞臺みな〳〵あきれてゐる。このうち花道よりお祭り左七、五寸だるみの股引、半天のうちへ、裏ゑりのかゝつた小袖を着、革羽織、蔦のものにて出で来る。跡より半時九郎兵衛、やつしもゝ引、あつらへの形、ほふかむりにて、鳥飼の蒸籠を両〔がけに〕かつ

き出で来り、〔花道にて〕お糸にゆきあふ。

九郎　妹のお糸じやアないか。

お糸　おまへは兄さん。

九郎　これからよろふとおもつた〔に〕、よい所〔で〕あつた。

左七　ハヽア、そんな〔ら〕あの子はこなさんの妹かへ。

九郎　めんぼく次第もないが、わしが身状がわるくつて、今にせびりやす。イヤ、こゝじやア何も話されない。妹、あそこへ歩びア。

お糸　イヘ、わたしやちつと。

九郎　ヱヽ、あゆびやれといふに。

トやはり右の呗、ひきつゞけにて、みな〳〵本舞臺へくる。お糸、下のかたの床几にこしをかける。九郎兵衛、蒸籠をおろす。

ずん　これは左七さん、いましがたまでみなさんが。

左七　そりや大かた権や八だろふ。今日は仲間の中直り。親分、風の神喜左衛門どのゝ名代に町場からすぐに深川くんだり、顔を出すも面役。帰りはまた、有象無象にとつつかれて、あひるでも負わにやアならねへ。

九郎　もし、この蒸籠はあの松本へ。

左七　そふさ。ほふりこんで下せへ。

九郎　合点でござります。ときに糸やの番頭さん、今永代でおまへさまの所の小僧が、山へゆくならこのはかまを届けてくれろ、その間におれは豆蔵を見ると、横着なやつさ。風呂敷がちいさいから、わしが風呂敷へつゝんで、くつつけて来ました。

ト蒸籠の棒にくゝしてある風呂敷をとつて、袴ばかりわたす。

左五　あの丁稚め、また野良をこいてうせる。

ト袴を取内、五平太、九郎兵衛がもつてゐる風呂敷に目をつけ、

五平　この風呂敷はおぼへがある。

九郎　ヱ、。

五平　さては、この間鎧のわたしで、家来小者がつゝみをぬすみとつたはわれだな。

九郎　ア、コレ〳〵、めつたな事をいわつしやんな。わしやアそんなものじやアごんせんぞへ。

五平　ぬかすまい。是、このふろしきの端に、山角氏と縫印。

九郎　サア、それは。

五平　これでもおのれ、あらそふか。

九郎　イヤ、この風呂敷はひろつた。

五平　なんと。

九郎　跡の月から本町の夜番にやとわれ、町内をまわる折、大道でひろつたこの風呂敷。夜番はものをひろうなと、おふれでもあつたか。

五平　ヤア。

九郎　このお侍は、滅多無性に人に難義をいひかける。おれもちつとやそつと、人におもてを見しられた九郎兵衛。ぬす人といわれちやアすまない。うぬ、どふするか見やアがれ。

ト蒸籠の天びんぼうをとつて立ちかゝる。

五平　おのれ、侍にむかつて慮外ぬかすと、ぶつぱなすぞ。

ト柄へ手をかける。

東林　モシ〳〵、めつたな事なされまするな。

五平　イヤ〳〵、この方にもおぼへある風呂敷ゆへ。

九郎　なんの事だへ。二本棒の侍と犬つころがこはくつて、江戸のすまゐがなる物かへ。これから死つくらだ。こゝへ出やアがれ。

五平　おのれ、もふ了簡が。

トぬいてぶつかける。九郎兵衛も天びん棒ふりあげる。みな〳〵こはがる。左七、中へはいる。

左七　これさ、あぶない。

ト留るもかまわず、両人たゝき合ふを、左七、棒のさきと、ぬきみをもつた腕をひつとらへる。

五平　イヤ、のきやれ。

九郎　退いてゐなんし。

左七　イヤ、めつたに退かれない。大道中のだんびら物。こんな中へはいるが、血の気のおゝい仕事師さ。さつきからの一部始終、語つて見りやア跡のないこつぱげんくわ。それにあぶなひぬき身の真中がつてんで〔とんで〕飛びこむ鳶頭。たがいにかんにん鉄棒の、火の用心より身の用心。おまつり左七がこりやもらつたから、じゆんわりと手をうつてくんなんし。

五平　イヤ〳〵、若もの、なんぼおぬしがいふ事でも。

左七　わしが仲人で了簡ならざア、喧咤に枝がさきやすぞへ。

左五　モシ〳〵、おまへがこゝにお出なすつちやアわるい。マア〳〵、松本へござりませ。

五平　イヤ〳〵、ぶつた切てしまふ。

九郎　まぐろの胴骨じやアあるめへし、ごたくを上げやアがるな。

五平　イヤ、おのれは。

皆々　マア〳〵、ござりまし〳〵。

ト わめく五平太を、左五兵衛・東林・義助・おまき、つきて鳥居の内へはいる。

お糸　どふなる事かとおもつたら、癪が痛ふなつたわいなア。

ずん　ほんに左七さん、大きにおせわでござりました。

左七　なにさ、おれも鳥飼からこの人をやとつて来て、いさくさがあつちやア気障だ。何かまちがいの筋ときこへるが、得手武左といふやつは、不理屈をいひたがるもの。イヤ、りくつといへば、あの子に咄があるといふ事。これ、ずん切、この蒸籠を松本へかつぎこんでくりやれ。

ずん　アイ〳〵、かしこまりやした。

九郎　そんならわつちやゆかねへでも。

左七　よいとも〳〵。○　アヽ、今日もまた友達めらがよわにやアよいが。

ト 大神楽、まりの曲の鳴物にて、左七さきに、ずん切蒸籠をかつぎ、鳥居の内へはいる。お糸、あたりを見回し、

お糸　兄さん、まだおまへ、心が直らんヱ。

九郎　そりや何を。

お糸　今もいまとて、外ぶんがわるふてなるこつちやござんせん。

ト 合方。

九郎　ハア、この風呂敷の事か。こりやアほんにひろつたよ。おれも手まへや女房のおときが事をおもつて、もふ〳〵いたぶりや手なぐさみを、さつぱりやめよふとおもへばこそ、本町へ夜番にたのまれ、大家衆のおあまり酒をのんで、たつた月に、弐貫五百、一年に四両あまり、この夜番を三〔十〕年もしんぼうすりやア、おぬしが身うけをするほどに、よろこんで居やれ。

お糸　なにを、三〔十〕年芸者してたまるものかいなア。

九郎　イヤサ、そふいわねへものだ。おぬしもそれをたのしみに、いまおれに。

お糸　また無心でござんすかいなア。

九郎　イヤサ、そふじやアないが、おれも兄弟の中でいゝにくい事だが、あの極楽水の相長屋のかゝアとねんごろして、か〔か〕ゞ亭主に見つかり、切るの突くのと乱騒ぎ。よふ〳〵御定りの七両弐分ですますはづだが、かんじんのその金にゆきづまり、よん所なく来た。それでなくつて、なんぼ妹だといつて、また今日も、どのつらさげていわれるものだ。もふ〳〵是にこりぬ事はないほどに、慈悲だ、なさけだ、兄ひとりすくつてくりやれ。

ト 泣く。

お糸　モウ、おまへのその猫撫声やそらなみだに、こりた物じやわいなア。

九郎　おぬしがこの金をかしてくれにやア、おれも〔でんど沙汰になつて〕恥つらかこふより、いつそ天水桶へ身をなげて死ぬぞよ。

お糸　あれ、またあんな事。

九郎　それで死なれにやア、せつかいで腹をきろふか。いつその事に、手ぬぐひで首をくゝつて。

ト手ぬぐひを出して首へまく。

お糸　ア、もふよいわいなア。所詮そふいひ出しては、只はいぬまい。これなと持てゆかしやんせ。

トうしろざしを弐本ぬいてやる。九郎兵衛とって、

九郎　こりやア弐本で弐両か三両。はつたりに売たら、もふちつとにならふか。

お糸　そんなことといわずと、もつてゆかしやんせ。○　イヤ、ゆかぬうちに聞ふとおもふて居たが、あのおまへにもわたしにも、親達が下さんしたといふ、真間の手古奈のお守。わたしやもつているが、おまへはどふしなさんしたへ。

九郎　サア、あの手古奈の守は。

ト言わふとする所へ、おまき出で来て、

まき　モシ〳〵、お糸さん、鳥渡きてくださんせいなア。

お糸　イヤ〳〵、わたしやもふ、あのお客の松本へゆくことは、いやでござんす。

九郎　ハテ、そふいわずと、何も商売。ゆきやれな。

まき　アレ、兄さんもあゝいふてじや。まア〳〵ちよつと。

お糸　ア、モウ、芸者にはなにがなるぞいなア。

ト辛気な思入。はやり哥になり、お糸・おまき、下座へはいる。

九郎　まづ妹めをせびつて、後ざしにまづ少〳〵ありついた。時に、この間鎧の渡で、よい〔どれ〕の中間めが風呂敷包、よいしろものとちよろまかして、あけて見たれば破のしめ。風呂敷ばかり弐百がものもあると、持料にしたら、おもひがけない、さつきの侍めがふろしきだそふだ。あぶない所を言ひぬけた。運にまかして、よい仕事がありそふなものだ。

ト向ふを見ておもいれして、下の方へ木がくれると、すぐに三味せん入の神楽、大拍子になり、向ふより石塚弥惣兵衛こま塩の侍、光若若殿、竹川お乳の人、若菜は腰元にて守をもち、跡より本庄綱五郎・近習・菖蒲革の侍・ぞうり取つきそろ出で、すぐに舞臺へ来る。この内下座より五平太出むかひ、平伏して、

五平　これは〳〵若殿さま、今日は二軒茶やへおたちよりとござりまするゆへ、おさきへ参つて松本へ、申つけおきましてござります。

光若　弥惣兵衛はすぐさま別当へ立こへ、右の子細申達すであらふな。

弥惣　御〔意〕でござります。お家のたから、小倉の色紙、すなはちこれへ持参仕てござる。

ト懐中より、ふくさ包の箱をいだし、

姫君おこし入れ、御婚禮の夜〔の床〕かざり。氏神にて礼拝致が御吉例ゆへ、その段申いれ相頼まするでござりませふ。

五平　シテ、松本へ下さるゝお目録は。

綱五　その義は拙者申つけ、これへ所持致おりまする。

ト ちいさな文箱を出す。

五平　御途中の義は一式私お係り、後かたまでに、家来にお渡し下されい。

綱五　承知いたしました。

五平　しからば私はお入り〔の〕用意申つけませふ。

ト五平太下座へはいる。このうち下の方より九郎兵衛聞てゐて、下の方につくばい居ねむりゐる中間の、脇ざしをぬすみ這入。

竹川　若様、おひさしぶりで富が岡への御参詣、御つきの衆もさぞよいなぐさみでござりませふ。

若菜　竹川さん〔の〕おつしやる通り、外珍しひ私共〔まで、目慣れませぬ春の景色〕ありがたふござりまする。

綱五　何はともあれ、まづ御神前へ。

弥惣　いざ、お入りあられませふ。

ト唄になり、みな〳〵下座へ這入。綱五郎つゝいてゆかふとする所へ、九郎兵衛いまの脇差を〔さし〕、つかみ〔手し〕て出で来り、

九郎　ヘイ〳〵、しばらくおまちくださりまし。

綱五　その方は。

九郎　私は山角が中間。主人申越まするは、只今おやくそくの松本へつかわさるゝお目録、あなたへ申てもつてまいるやうにと、申付ましてござりまする。〔へい、〕私は新参、お見しりないゆへ、これを證據に持て参れと、則主人がなまへの風呂敷。

ト懐中より出して見せる。

綱五　ムウ、相違もあるまい。しからばそちに。

ト左の手に文箱を出そふとする。

九郎　ヘイ〳〵、慥にわたくしが。

トとろふとする、その手を綱五郎しつかりととらへる。

アイタ、、、、、こりやなんとなされまする。

綱五　なんとするとは、こゝな紛れものめ。

九郎　ヤア。

トびつくり。

綱五　中間小者が〔主〕人の供に股引はかふや。察する所、かたりのくせもの。

九郎　南無三、しまつた。

トふりきらふとする拍子に、九郎兵衛が〔きゝ腕まくれる。綱五郎、〕腕のほりものを見て、

綱五　ヤア、小糸命のこのほり物は。

九郎　何を。

ト立回りにふりきり、九郎兵衛、いつさんに向ふへ逃てはいる。綱五郎跡を見おくり、

綱五　ハテ、ゆだんのならぬ。

トはかまのちりをはらふ。佃の騒ぎになり、綱五郎、ゆふ〳〵と下座へはいる。右の鳴物にてこの道具をぶんまわす。

本舞臺、正面弐間の屋台。向ふ床の間、襖。上の方壱間のはなれ座敷、障子建、この間鉄炮垣植込、手水鉢。下のかたに正面へ見せたる萱門、建仁寺垣、二軒茶や松本と書ひたる行燈、このみの通り。ここに左七濁酒を取、ずん切・蔦の者八、酒のみゐる。おつた、松本の女房にて酌をしてゐる。蔦の者権・△、はだかにてとつくみゐる。右の鳴物にて道具留る。

左七　こいつは面しろい。夏ならば泉水へとびこんで、たゝき合といふ所だが、一ばんとれ〳〵。

権　どつこいな〳〵。

蔦△

トつかみあふ。

ずん　それ〳〵、右の足がういた。左をさして、それ、のこつた〳〵。

蔦△　よんやさ。

ト権をなげ出す。

ずん　勝角力、足場山〳〵。

ト給仕盆を団扇のやうに上る。

左七　まて〳〵。あいらがのは無手だから喧嘩がましだ。いつそずん切、三人がゝりをとつて見せないか。

ずん　何をするも稽古の為だ。一番とりますべい。

トはだかになる。

三人　こいつは面白いナア。

ト蔦の者権・八・△、かゝるを、一寸と立回つて、ずん切、三人をおもしろくなげる。

つた　勝角力、ずん切〳〵。

左七　こいつは身ぐるみやらにやアならない。

ト半てん・革羽折をなげてやる。

つた　東西〳〵、去るおかたよりずん切に御祝義下さる。

三人　どふでも、商賣人にはかなわない。いま〳〵しい。

ずん　こりやアありがたい、半てんに革羽織。しかしほんの冗談こにお

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com